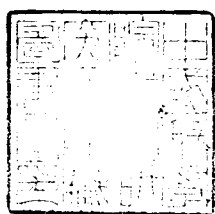


宋

磁石

宋磁

小山富士夫著



江苏工业学院图书馆
藏书章

宋磁奥付

昭和十八年七月一日印刷
昭和十八年七月五日發行
昭和十八年十二月十日再版發行

著者

鎌倉市二階堂八〇九

小山富士夫

發行者

東京都本郷區根津須賀町七

秋葉啓

印刷者

東京都神田區猿樂町二丁目四

松浦九一

東京三三二六

不許複製製

出文協承認い310635

原色版

東京都品川區大崎本町三ノ五八二

半七寫真製版印刷所

玻璃版

東京都澁橋區戸塚町一ノ五三二

關原精々社

配給元

東京都神田區淡路町二丁目九

日本出版配給株式會社

別裝幀版

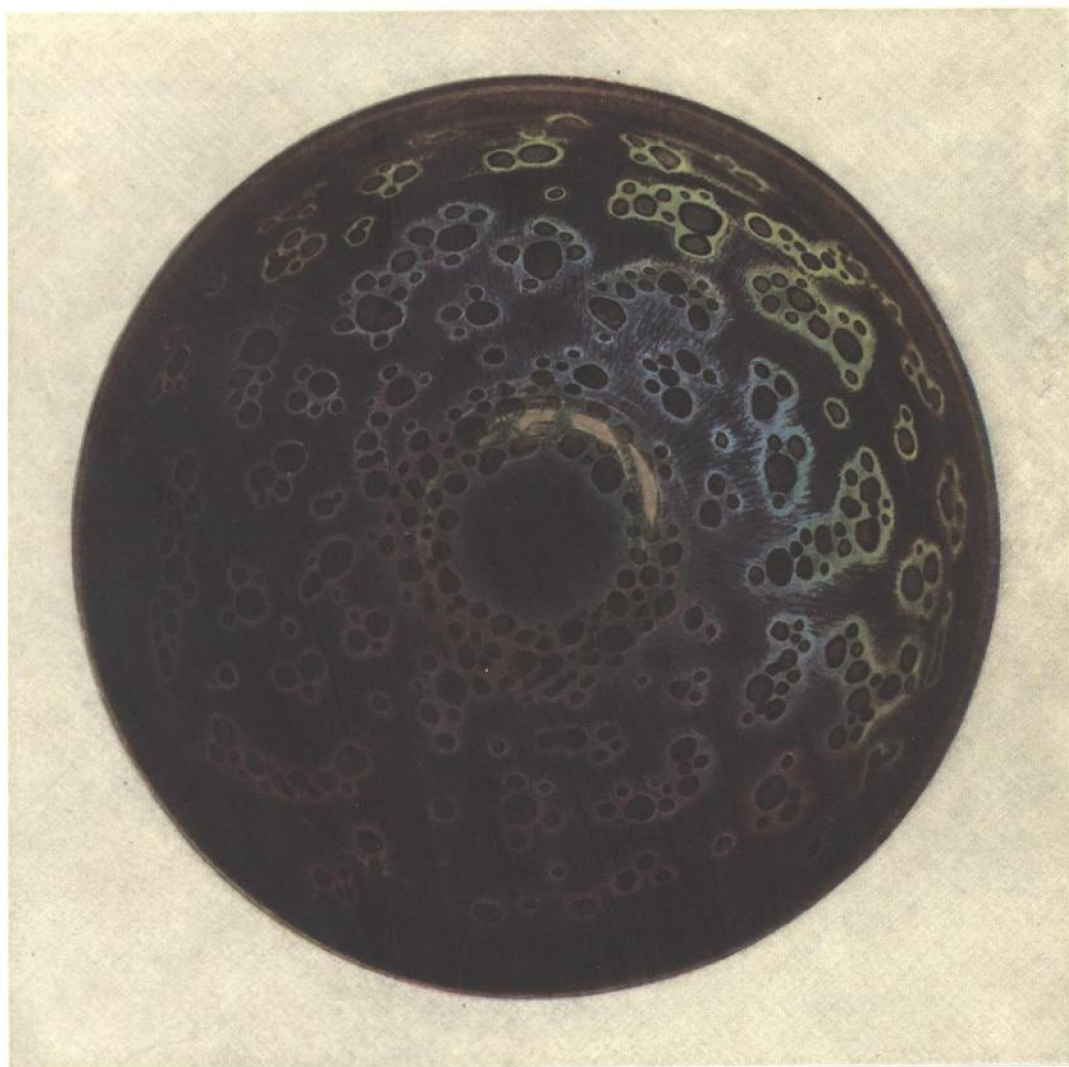
發行所

東京都本郷區根津須賀町七

聚樂社

電話下谷八三二五番
振替東京七七九七六番
會員番號一一二一六番

Handwritten signature or scribble at the top of the page.



この著を昭和十八年六月十五日華甲の
壽を迎へられた奥田誠一先生に捧ぐ

序 言

ものゝ好みにも發達變遷があるやうである。然し、かれこれ二十年前、始めて私が古陶磁器を識つてこの方、終始一貫心の一角を領して退かないのは宋磁である。宋磁には瀬戸や唐津のやうに深く心にまつわるものはない。信樂や備前のやうな枯淡なやわらかさはない。同じ白磁でも李朝のやうな靜かなあたゝかさはない。寧ろ何か我々を反撥し、その美しさも表被一皮といった薄つぺらさを感じさせるものが多い。然しなぜかうも強く永く我々を牽きつけるのだらうか。私は單なる美しさばかりでなく、これを生んだ高い強い精神があるからだと思ふ。宋磁の持つつきつめた心、張りつめた氷のやうな切實さ、見るたびに心の隅々まで洗ひ澄ますやうな清らかさには永遠の新しさがある。

ひさしい歲月の間に、私の見た宋磁やその碎片は何萬何十萬點に及ぶであらう。その中には人にも見せ、ともどもに拜見したらと思つたものもいくつかはある。然し私はかつてこれを圖録にまとめたと思つたことはなかつたが、昨秋聚樂社の秋葉啓氏から、是非宋磁を出したいからとこれを囑せられた。この非常時局に贅澤な鑑賞圖録を出すことは國民の一人として秋葉氏も私も慚しむべきであらうが、宋磁は東洋の精神の核心をつかみ、最もよくこれを表現したものゝ一つである。宋磁のもつ氣魄と精神こそ戦ふ日本の強く堅持すべきものであらう。私はこの著を單なる鑑賞的な圖録ではなく

出来るだけ知的な解明も加へてみたいと思つた。圖版を斷つて支那南北に二大別し、更に各窯を年代的に配列したのもこの意圖によるものである。又これに附加した序説は、今日までに私の考へたこと知見したことの大概である。まことに不備なものであり、猶々究明したいことばかりではあるが、從來東洋を我物顔に蹂躪してきた歐米の瓷學者たちには譲らないつもりである。

この著は私の名で公にする最初の出版であるが、この著を今年還曆を迎へられた恩師奥田誠一先生に贈ることの出来たのはこの上もない幸ひである。いくらか古陶磁器のわかり、多少ともこれを研究する機會を與へられたのは全く先生の御蔭である。先生とは日々餘りに接近する機會が多いため却つて謝意を表する機會がなかつたが、この著を先生への衷心よりの感謝のしるしとしたい。

猶この著を編するに當つて、祕藏の名器の撮影公開を許された帝室博物館、根津美術館、細川侯爵家、岩崎男爵家を始め、蒐藏諸家の厚い御好意に對し甚深の謝辭を述べたい。又これを上梓することの出来たのは、ひとへに秋葉啓氏の熱意と、坂本万七氏の卓拔な撮影技術と、斡旋の勞をとられた廣田松繁、繭山順吉兩氏の盡力によるもので、併せてこゝに厚く感謝の意を表したい。

昭和十八年六月

小山 富士夫

序 說

小
山
富
士
夫

概 説

緒言 宋磁は悠久四千年の支那民族史上に咲いたまことにも清らかな花である。支那の陶磁器は漢六朝を搖籃期として、唐代急激な發達進歩をとげたが、その最高潮に達したのは宋代である。元代一旦凋落した支那の窯技は、明中期から清初にかけて、再び絢爛多彩な盛榮期を現出してはゐるが、燦然たる宋代特に北宋末の黄金時代は遂に再び歸らなかつた。宋代支那の窯藝は空前絶後ともいふべき一時代を劃してをり、その技術の最高度に發達すると共に又最もよく民族的な特質と、嚴正な時代精神を表現してゐる。

宋代支那南北各地には、定窯汝窯均窯東窯磁州窯宋官窯龍泉窯建窯景德鎮窯吉州窯を始め、多くの窯が相繼いで起り、幾多の名作を今日に傳へてゐるが、宋代の陶磁器はいづれも簡潔澄明な美しさに輝き、清新潑刺たる感覺が漲つてゐる。その形態には清瘦な骨法があり、その文様には緊密銳勁な氣魄が溢れ、その釉藥には清純幽玄な精神がたくへられてゐる。宋磁には豊麗な唐磁のもつ大らかさはない。又濃穆な明磁のもつ華かさもない。然し、古今東西の陶磁器で、宋磁ほど崇高な感じと、明晰な表現をもつたものがあらうか。今日その聲價の世界的に高く、支那陶磁器といへば、その核心的な存在として、先づ宋磁の擧げられるのも亦當然のことであらう。

宋磁に表はれた時代の思潮 朱琰は陶説の序に「陶によつて政を觀る」と述べてゐる。換言すれば、時代の產物である陶磁器が、自らその時代の氣風好尚を反映してゐるのは當然のことであるが、特に表現技術の芽えた宋代の陶磁器は、嚴正崇高な時代の精神と、純潔瀟灑な宋代知識人の好みをよく表現してゐる。

宋の太祖趙匡胤は天下の兵權を掌握して帝位につくと共に、武人跋扈の宿弊を除くため、治政の方針を文教に置き、國初以來學問文藝の保護獎勵に力を盡した。爾來文治は宋朝三百年を通じての政治思想である。そのため唐末以來萎靡衰退してゐた學問研究が勃然として起り、支那學術史上特筆すべき宋學が樹立され、美術文藝も亦遽かに盛んとなつた。殊に留意すべきことは、これらの學問文藝が、單に貴族や一部讀書人の間で盛んだつたばかりでなく、これが一般庶民階級にまで浸潤し、社會全般の文化水準を高めたことである。その理由として國家が國是として學問藝術を保護獎勵したこと、文化開發の地域の擴大されたこと、印刷術が發達し書物の廣く一般に普及したこと、科舉制度が實施され一般庶民にも官途につく者の多くなつたこと、商業の發達とともに庶民生活の著しく向上したこと等が挙げられてゐるが、その結果として社會全般に教養ある人士が多くなり、これらの人々によつて宋代社會の思想動向が導かれてゐた。

宋代社會思想の主潮をなすものは儒教である。儒教は宋代特に北宋仁宗の頃から盛んとなり、「正學の昌明古今を空しうす」と評されてゐるが、歐陽修・司馬溫公・周茂叔・程明道・程伊川等の碩儒が相繼いで輩出し、降つて南宋には大儒朱熹が現はれ、孔孟の教へを宗旨とし、佛老九流諸子の説を融合して、こゝに宋學を大成した。そして朝廷には、その教を奉じた名賢儒臣が相繼いで集り、内政に參與し、社會の風教を導いたため、宋代社會には端嚴な儒教精神がひろくひろまり、純理の追求は宋代文化の主潮をなしてゐた。従つて崇高なものを尊び、冷嚴な清純さ、清虛灑落な趣きを愛することは宋代人士一般の傾向で、この社會的な嗜好感情は自ら器皿の端々にまで現はれずにはゐなかつた。宋代の陶磁器が總じて崇高緊密、冷嚴清澄な感じのあるのはこのためで、當時の社會人心の自らなる現はれといふべきであらう。

又宋代知識階級の間には排佛論が流行し、佛教は概ね低俗化して社會に對する指導性を喪失してゐたが、獨り禪宗

だけは一部知識人の間に榮え、禪林に入つて簡易直截な風尚を愛好し、幽玄深邃な哲理を追求する人士が少くなかつた。これ亦宋磁に幽玄蒼古な趣きをそへた一つの社會的な理由となつたのであらう。

即ち宋代社會の思潮を導いたのは、儒學の純理主義と禪宗の哲理的傾向とであつたが、この氣風は自ら宋代の繪畫書風、工藝一般にも反映してゐた。例へば北宋畫の寫實的であり、強い明確な筆法で自然の崇高性を表現するのを特徴とし、宋代の書道の端正な峻嚴さを尊び、工藝品のすべて高潔簡明な感じのあるのはその一例である。

宋代の陶磁器は多くは純白であり、漆黒である。或ひは清澄無垢な青白色を帶び、幽玄深邃な粉青色を呈してゐる。又、その器形の端正でひき締り、文様の強く鋭く、全體として簡潔清新な美しさがあり、理智的な感じのあるのは、宋人の心境そのものを具象化したもので、宋代の思想精神の如何に峻嚴純烈であつたかを想像することが出来る。

商工業の發達と庶民生活の向上

古來支那には商業を卑しめ、商人を輕んずる風があり、都市の計畫も前朝後市を一般とし、義を先にし、利を後にする思想がある。唐代以前の支那各地の都市はすべて政治本位で、商人の住居は從屬的な立場にあつたが、宋代に至り、これが一變して各都市とも著しく商業化し近代化した傾向がある。これは宋初以來久しく秦平の世が続くとともに、牙僧又は經紀と呼ぶ大規模な仲買業が起り、飛錢と呼ぶ爲替法や、交子と呼ぶ一種の紙幣が流通し始め、經濟機構が全く一變すると共に、商業が急速の進歩をとげ、商人の社會的地位も遽かに高まつた。又、各都市とも從來施かれてゐた坊制（都城内を更に小地域に區劃し坊牆をめぐらし、交通往來に制限を興へた制度）が廢され、店舖の様式が明朗近代化し、寄席妓館酒樓の類の娛樂機關が發達し、市民生活が著しく開放融合的となり、一般庶民の社會的擡頭に伴ひ、その生活も頗る奢侈豪華となつた。

例へば北宋の首都開封は、商業地區が繁榮膨脹し、到底外城だけではこれを收容しきれず、外城の各門外には更に廣大な新繁昌地區が現出する有様で、十字街、潘樓街、竹竿市、榆林巷等の繁華街には、宏壯な大商店が軒を列べ、麥稻巷殺猪

巷等の妓館區には、當時二萬の妓女がゐたと傳へられ、桑家瓦子中瓦子裏瓦子等の盛場には大小五十餘座の寄席興行場があり、特に有名だつた蓮花棚、牡丹棚、夜叉棚、象棚等は、それぞれ數千人の觀客を收容出來たと傳へられてゐる。又經濟生活の膨脹に伴ひ、一般に酒食が著しく贅澤となり、食道樂の風が天下に流行し、各都市には料理屋、酒樓の類が激増した。當時これを花茶房又は人情茶房等と呼び、その規模は實に豪壯なものであつたが、これらの店では概ね純銀の器を用ひ、稀には純金の皿鉢を使つて人氣を呼んだが、又競つて高級な陶磁器を使用したと傳へられてゐる。

宋代商業の勃興に伴ひ手工業も亦遽かに盛んとなつた。宋代特に盛んだつた手工業といへば纖維工業、陶磁器、漆器、紙、蠟燭等であるが、例へば、宋史地理志土貢の條には、當時朝貢した絲織品の細目が列擧してあり、同じく綾羅でも方紋綾、仙紋綾、大花綾、越綾、花羅、春羅、單絲羅等の區分があり、纖維工業が地方により著しく分業化し専門化したことが想像出来る。又、宋史地理志には宋代紙を土貢とする地方として、淮南路の眞州、江南の池州、徽州、兩浙路の臨安府、温州、婺州、衢州、成都府路の成都府の八地方を擧げてゐるが、これに對し唐通典には、唐代紙を土貢とした地方として、東陽郡（宋代の婺州）を擧げてゐるだけである。又宋代瓷器を朝貢した地方としては、河北路の邢州、京西路の河南府、陝西路の耀州の三箇處を擧げてゐるが、これに對し唐代瓷器を貢したのは河南府だけである。これによつても宋代手工業が著しく發達したことが想像出来るが、宋末から元初にかけて、十六年間支那に留り、一二九四年郷里伊太利のベニスに歸つた有名なマルコ・ポーロは、著書「東方見聞錄」の中に、當時支那の手工業の發達は、當時歐羅巴第一の手工業都市とされてゐたベニス、ミラノを始め、イタリヤ各主要都市の手工業を遙かに凌いでゐたと述懐してゐる。

宋代支那の陶磁器は、商業の發達、庶民生活の向上に伴ひ、その需要が急激に増加したが、これと共に製陶技術も亦大いに進歩し、その製産額も著しく増大した。殊に北宋中期から末期にかけて、上は帝王貴族から、下は一般庶民に至るまで、その生活が豪華を極め、趣味生活の深く細かくなると共に、その陶磁器も亦最高度の發達を示してゐる。北宋末

宜和政和頃の陶磁器には、寔に神技ともいふべき精妙古今に絶するものが多いが、これは當時の帝王貴族の生活が、如何に豪奢を極めたかを雄辯に物語るものである。當時の豪華絢爛な生活の様子は、『東京夢華錄』にこと細かに記述されてゐるが、物質生活の餘りの向上はやがて精神を喪失させ、遂には靖康の難を招き、宋室南渡のやむなきに至つたのであらう。

即ち宋代の陶磁器は、當時の有識者の好みに従ひ、よくその精神思想を表現してゐるが、これを發達大成させたのは一般庶民生活の向上と、商業の發達繁榮によるものであらう。然し更にこれを助成した一つの理由として、當時海外貿易が盛んとなり、陶磁器が主要貿易品として盛んに輸出されたことも亦その一つの原因と見るべきであらう。

宋磁の海外輸出 支那と西方諸國との交通は、南方海上よりするものと、北方陸路によるものがある。ともに古くから開けてゐたことは周知のことであるが、宋代に於ける東西交通の發達は、東洋史上最も顯著な現象の一つとされてゐる。

西曆八世紀から十五世紀末にかけて、即ち唐宋元明の四朝に互る約八百年間、東西貿易の霸權は大食人^{タリク}が掌握してゐたが、特に宋代になつて大食人の通商貿易は著しく活潑となつた。そのため宋は初め廣州^{カンフー}、廣東、明州^{ミンチウ}、寧波、杭州^{カンフー}、浙江省の三港を開いてゐたが、後、温州^{ワンチウ}、浙江省、泉州^{クワンチウ}、福建省、江陰^{カンイン}、江蘇省、密州^{ミチウ}、山東省、澈浦^{セツポ}、浙江省をも新らたに貿易港として開き、これらの諸港から上る外國貿易の収入は、宋代を通じて國庫の主要財源の一つであつた。當時これらの諸港に來航した大食船は夥しい數だつたらしいが、又、羅針盤の發明、造船技術の進歩に伴ひ、支那船の西南諸國に航海するものも次第に多くなり、東西の交通は更に一層頻繁となつた。當時南海諸國アラビヤ・ペルシャ方面から支那に齎^{もちこ}らされたのは、眞珠、象牙、犀角、樟腦、乳香、沈香、煎香、珊瑚、瑠璃、瑪瑙、玳瑁、梔子香、薝蔔、水龍涎、藥物類で、これに對し支那から輸出されたのは、絹帛、錦綺、漆器及び陶磁器である。宋代陶磁器がひろく海外に輸出されたことについては多くの記録があり、例へ

ば宋史食貨志互市舶法の條には

宋太祖開寶四年市舶司を廣州に置く、後又明州に司を置く、凡そ大食古邏閣婆占城勃泥麻逸三佛齊の諸蕃は並びに貨易を通ず。金銀繒錢鉛錫雜色帛瓷器を以つて香藥犀象珊瑚琥珀珠琲鑲鐵鼈皮瑋瑁瑪瑙車渠水精蕃布烏欄蘇木等の物を市ふ。

とあり、宋初既に陶磁器が貿易品として輸出されてゐたことがわかり、又同じく食貨志香の條に

南宋寧宗嘉定十二年臣僚言ふ「金銀を以つて乳香を博買し、之を遠夷に洩らすは惜しむ可しと爲す」と。乃ち有司に命じて止だ絹帛錦綺瓷漆の屬を以つて博易せしむ。

とあり、後金屬貨幣の輸出が禁止されてからは、絹帛漆器とともに、陶磁器が主要貿易品であつたことがわかる。

當時、印度支那、泰馬來、マキリツビン、東印度諸島、遠くペルシャ、エジプト、歐羅巴各地に輸出されてゐた宋磁は莫大な數量らしく、今日これらの地方に傳來する遺品や、これら各地の遺蹟から發見される宋磁だけでも相當な數である。

宋と我國との貿易は、これら南海西方諸國との貿易ほど盛んではなかつたやうであるが、然し、藤原時代の經塚から出土する夥しい數の青白磁の合子、小壺、皿の類や、鎌倉海岸で採集された數萬の青磁片や、太宰府址、博多灣、唐津、草戸庄を始め、我國各地の遺蹟から發見される青磁、青白磁を見れば、當時我國に將來されただけでも驚くべき數量に達し、宋代陶磁器の製産が如何に盛んだつたかが想像出来る。

宋窯概説

南船北馬を支那交通上の特徴とすれば、南磁北陶は支那陶磁器の一大區分である。かつて中尾萬三博士は、支那は南北でその陶磁器に著しい相違があり、その製品窯様式、燃料、焰性、製作技法が全く異つてゐることを提唱されたが、寔に傾聴すべき卓見だと思ふ。即ち中南支には古くから磁器が發達してゐるのに對し、北支では概ね陶器を産し、中南支の窯はすべて傾斜面を利用した登窯であるが、北支の窯はすべて平地に築かれた丸窯である。又、中南

支の窯はすべて薪を燃料としてゐるのに對し、北支の窯はいづれも石炭で焚き、從つて南は概ね還元焰燒成であるのに對し、北は酸化焰燒成である。又、中南支では磁胎にすぐ釉藥をかけて燒くが、北支の陶器は概ね器地を白化粧し、その上から釉藥が施されてあり、又、北支の陶器にはその器形文様にイラン文化の影響の認められるものが多いが、中南支の磁器は概ね支那独自の器形文様のものが多い。

支那南北に於けるこれらの相異特徴は、宋代の陶磁器に就いても言へ、建窯其他一二の例外を除けば、龍泉窯景德鎮窯吉州窯等、宋代中南支の主な窯ではすべて磁器を産し、定窯及び遼上京での仿定窯を除いては、北支滿蒙の窯はすべて陶器である。其他、窯様式燃料焰性に就いても同じことが言へ、支那南北に於ける陶磁器の相異は、宋代既に截然たる區別があつた。

支那の陶磁器産業は、明以降著しく集約的となり、全産額の過半數は江西省景德鎮窯が占めるやうになつたが、宋以前の窯は南北各地に分散してをり、それぞれの作風特徴を保持してゐた。然し同じく宋代の窯でも、北宋のもの、例へば定窯汝窯均窯平定窯宿州窯泗州窯蕭州窯、北宋官窯東窯磁州窯等は、いづれも北宋の首都開封を中心として發達し南宋の窯、例へば南宋官窯龍泉窯建窯吉州窯德清後窯等は南宋の首都杭州を中心として發達したのは留意すべきことであらう。

元明以降、支那の陶磁器はその相貌を一變した。宋代盛んだつた白磁青磁天目風のものから轉じて専ら染付赤繪辰砂の類が流行しだし、宋磁のもつ純粹眞摯な作風から、明磁のもつ猥雜濃穆多彩的なものに變つてゐる。降つて清朝になると更に繁褥絢麗となり、粉色鬼巧の極りを盡すやうになり、遡つて唐代のものにも、どこか多技的な異國的な感じがあり、支那歴代の陶磁器を通じて、最も純粹な、最も簡素な、又何か精神的な民族的なものを感じさせるのは宋代の陶磁器である。

然し、同じく宋代の陶磁器でも、北宋のものと南宋のものではこの間に著しい相違がある。北宋初期のものは、唐五代の流れをくんでその形に豊かな大きさがあり、その文様もイラン系の何となしにエキゾチックな感じのするものが多いが、北宋末になると、その形が瘦せて清らかとなり、文様も民族的な支那独自のものが好まれた傾向がある。そして作行が鋭く薄く、表現技巧が驚くほど冴え、支那陶磁史を通じて製陶技術の最高度に發達したのはこの時代である。これが南宋になると先づ形が崩れ、作行がぼてぼてと厚くなり、北宋末のものゝやうな纖銳な感じがなくなつてゐる。又、北宋のものは、その製作理念ともいふべきものが嚴正な儒道精神から發してゐるやうであるが、南宋のものは禪寂な佛教思想から發してゐるやうに思はれる。これは必ずしも私のこぢつけばかりではない。周知のやうに宋代の佛教、特に禪宗の盛んだつたのは浙江、福建の兩省で、南宋の首都杭州はその中心地であつた。杭州を中心として發達した南宋の陶磁器には佛教的な色彩が強く、南宋の陶磁器特に青磁に、香爐、佛花器、佛飯器、其他の佛器が多いのはこのためであらう。これに反し、北宋末の優品といへば多くは支那古來の銅器を模した酒器が多く、儒教的な色彩が深い。北宋と南宋のものゝ違ひは、北宋の代表的な窯である定窯、汝窯の製品と、南宋の代表的な窯である南宋官窯、龍泉窯の製品を比較すればよくわかるが、又、同じく景德鎮窯の俗に影青と呼んでゐる青白磁でも、北宋のものは紙のやうに薄く、觸ると切れそうな鋭い感じがあるが、南宋のものは形もだれ、作行もどこかぼてぼてとし、文様も北宋のものゝやうにはつきりとし、これは同じく我國の遺蹟で發見される影青でも、藤原時代の經塚から出る合子、小壺、小皿の類と、鎌倉海岸、福山、草戸、唐津、山本其他鎌倉時代の遺蹟で採集される影青を比較すれば、一目瞭然として、この間にはつきりとした區別が認められる。其他均窯にしても、磁州窯にしても、概ね北宋のものは精薄緊密で作行が冴え、南宋のものは粗厚麤笨で、ことなしに作風がだれてゐる。

宋代支那にどんな窯があつたか。詳しい研究調査はとげられてゐないが、今日知られてゐるだけでも相當にある